

基礎看護学実習Iでのシャドウイングによる看護学生の学びの効果

堀 香純 柴田 恵美 田山 友子

Key Words : シャドウイング, 基礎看護学実習, 看護学生, 初学者

【要旨】 本研究の目的は、基礎看護学実習I終了時に実施したアンケート調査からシャドウイングを行う効果について明らかにすること、今後の実習の方向性の検討のための基礎的資料を得ることである。

アンケートには、シャドウイングによって看護師を目指す者としての自分への影響について98%もの学生が「あった」としていた。学生の自由記載から得られたその具体的内容を実習目標に照らし合わせて、4つのカテゴリーと11のサブカテゴリーに区分し考察した。その結果、シャドウイングは初学者である看護学生にとって看護師の特徴、特に看護活動のイメージ化を図るという効果が大きいことが明らかとなった。また、さらに効果的にシャドウイングを進める上での必要条件、重要事項として、学習目標の更なる明確化、ガイダンス内容の精選と実施方法、実習記録内容の精選、主体的に学ぶための学生自身への意識付け、ロールモデルや実施内容についての臨床との調整、実施後教員や指導係との振り返りの場を設ける必要性についても明らかとなった。

I. はじめに

基礎看護学実習Iは、看護における基礎的理論や基礎的技術を学ぶ専門分野Iの基礎看護学に位置づけられる。臨地での体験を通して看護活動の場・対象・役割を理解することを目的とし、実習目標(表1)達成のために1年次11月に1グループ8~9名の学生を10病棟配置し病院実習を4日間行っている。尚、実習目標は評価基準も兼ねているが、目標IIIのコミュニケーションについては体験目標として位置づけており、その他の評価項目のように5段階での評定対象とはしていない。

対象学生はこれまでに看護学概論の授業を通して看護の意義や価値について、看護技術Iでは基本となる技術と日常生活に関する援助技術について学習をしてきた。本実習ではその既習内容をもとに、実習目標達成に向けて以下の経験をする。

- 看護活動の場である病院で看護の対象となる患者に接し、基本となる技術・日常生活行動の援助を見学・実施する
- 病棟師長から経験談や看護に対する考えについて聞く

II. 実習の概要

1) 対象

基礎看護学実習Iを終えた、A看護専門学校3年課程の1年生84名

2) 調査機関

A大学病院の10病棟(婦人科、心臓・血管外科、耳鼻咽喉科、脳神経外科、整形外科、眼科、消化器外科、循環器内科、混合病棟)であった。

3) シャドウイングの実際

病棟実習4日間の中で半日もしくは1日、病棟スタッフ1名に学生2~3名が付いて共に行動し、看護師の動きや実際の看護場面を体験・見学する。全学生がそれぞれの実習病棟で経験する。学生は事前にシャドウイングでの目標を立て、実習後にはその評価とともに感想や考えを記録物として提出する。

III. 研究目的

基礎看護学実習I終了時に実施したアンケート調査からシャドウイングを行う効果について明らかにする。またその結果から、今後の実習の方向性の検討のための基礎的資料を得る。

表1 基礎看護学実習Ⅰ 実習目標

I. 看護活動の場と看護の対象を理解する
1. 医療施設における看護師の役割と活動の特徴を理解する
2. 成長発達段階や基本的欲求の側面から対象を捉える
II. 原理・原則を踏まえ、対象の状況に応じて基本となる技術・日常生活行動の援助技術を実施する
III. 相手に関心を持ってコミュニケーションをとる
IV. 看護の役割を理解する
1. 看護への興味・関心が深まる
2. 看護の対象となる人への思いや看護の役割について自分の言葉で表現する
3. 看護者としての倫理観必要性を理解する
V. 学習方法を理解する
1. 計画的に学習することの必要性を理解する
2. 問題解決型の学習をする必要性を理解する
3. 実習グループを育て、互いに高め合う必要性を理解する
4. 実習生としてのマナーを守る

IV. 用語の定義

シャドウイングとは、臨床の看護師に「影」のように密着して行動を共にし、看護の実際を間近で見学することである。

V. 研究方法及び期間

1. 調査方法

実習終了後にシャドウイングによる自身への影響の内容について「大変あった」「少しあった」「どちらとも言えない」「あまりなかった」「全くなかった」の5段階で答えるアンケートを無記名で行った。そのうち、「大変あった」「少しあった」と答えた者を対象に自由記載された内容をまとめた。

2. 病棟実習期間

平成24年11月12日(月)～11月15日(木)

3. 分析方法

実習終了後のアンケートでシャドウイングの学びについて学生が自由記載した内容を類似した記述内容に分類し、カテゴリー化する。学生が自由に表現したものについては共同研究者3名で記述の意味を読み取り、抽出した意味・内容が変わらないように要約し、類似性・相違性に基づき分類した。

VI. 倫理的配慮

東京医科大学医学倫理委員会にて事前審査を受け承認、学長の許可を得た。その後、対象者の施設における倫理審査を受け承認を得た。

記録用紙は無記名とし結果は統計的に処理され個人や所属施設が特定されることはないこと、調査で

得られたデータは研究目的以外に使用することはないこと、研究への参加は自由意思に基づくものであり、協力の諾否によって成績に影響することはないことを文書および口頭で説明し、同意を確認した。

VII. 結 果

調査対象者数は84名、回収数は77名。そのうち有効回答は57名(74%)であった。

シャドウイングによる自身への影響について5段階で答える設問に対して、次のような結果が得られた。「大変あった」: 66人(86%)、「少しあった」: 9人(12%)、「どちらとも言えない」: 1人(1%)、「あまりなかった」: 0人、「全くなかった」: 0人、無回答: 1人(1%) (図1)

このうち、「大変あった」「少しあった」と回答した学生を対象にどういった状態の影響があったのか具体的なその内容について自由記載してもらい、57名の学生からデータが得られた。それらから59のコードを抽出し、それぞれ本校の基礎看護学実習Ⅰの実習目標と照らし合わせて、「看護師の活動の特徴」, 「看護への興味・関心」, 「倫理観の必要性」, 「学習することの必要性」の4つのカテゴリーと11のサブカテゴリーを抽出・分類した。

それぞれのカテゴリーの全体から見た割合は、「看護師の活動の特徴」59.1%、次いで「看護への興味・関心」20.3%、「学習することの必要性」16.9%、「倫理観の必要性」3.3%という結果になった。(図2)

【看護師の活動の特徴】のサブカテゴリーは「効率的な行動」[コミュニケーションの実際][連携と調整の実際(チーム医療)][イメージ化]の項目に

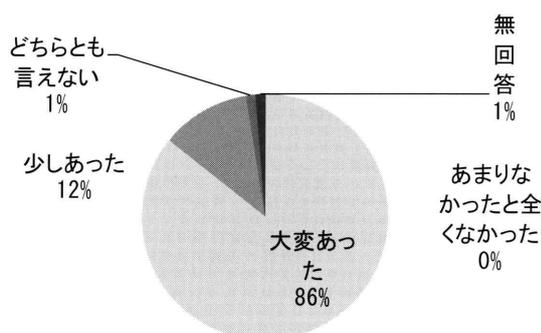


図1 シャドウイングによる自身への影響

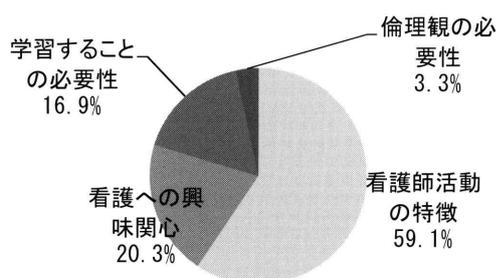


図2 4つのカテゴリーの割合

区分した。【看護への興味・関心】は「憧れ・ロールモデルの獲得」「モチベーションの向上」「やりがい」の項目に区分した。【倫理観の必要性】については類似性が強く少数であったためサブカテゴリーはなしとした。【学習することの必要性】は、「学習内容の目的の明確化」「知識の必要性」「体力の必要性」「意識の高まり」のサブカテゴリーに区分した。(表2)

サブカテゴリー別に見ると、【看護師の活動の特徴】では「イメージ化」37.1%、「効率性」「コミュニケーション」が共に28.5%と割合が多く、【看護への興味・関心】では、「憧れ・ロールモデルの獲得」の割合が66.6%と高く、【学習することの必要性】ではコード数自体が少ないが、「知識の必要性」「学習内容の目的の明確化」が大部分の7割を占める結果となった。

VIII. 考 察

シャドウイングによって看護師を目指す者としての自分への影響について「大変あった」「少しあった」を合わせると98%もの学生が「あった」としており、初学者とはいえ、実施前後での看護学生としての変化を感じることができていることがわかった。その

具体的な内容としては、【看護師の活動の特徴】の中の「看護活動のイメージ化」が13件と最多であった。看護師の仕事について、初学者である学生は十分なイメージがついていない。基礎看護学実習Ⅰの時点で、看護学の基礎を学ぶ専門分野Ⅰにおける既習科目は看護の対象と目的について広い内容を学ぶ「看護概論」と日常生活援助、診療の補助行為の内容と方法を学ぶ「看護技術Ⅰ・Ⅱ」である。よって、看護技術の内容や方法、実施の場面など断片的にはイメージが付きやすいものの、看護師の1日の動きとなると曖昧となる。また、将来看護師を目指す看護学生として、看護師の仕事が具体的にどのようなのか知りたいというのはごく自然な感情といえる。

次に多かったのは同じカテゴリーである看護師の活動の特徴の「コミュニケーションの実際」が10件であった。コミュニケーションについて、本校では看護技術Ⅰで基礎看護学実習前に基本的なコミュニケーションの概念は学ぶが、コミュニケーションの方法を学ぶ「コミュニケーション論」は2年次の科目であり、対象学生は専門的な知識をほとんど持たない。しかし、学生ら自身も実習中には受け持ち患者とコミュニケーションをとり、ケアの実施や大まかな患者全体像を捉えなければならず、自分自身も実際の患者とコミュニケーションをとらなければならないという切実さがある。よって、学生は看護師の実際の方法を参考にしたいとの思いがあると考え。また、学生が事前に立ててきたシャドウイングをするにあたっての目標は26%の学生が「看護師がどんな仕事をしているのかを知る」、70%の学生が「看護師の患者とのコミュニケーションのとり方を学ぶ」という内容を掲げていた。実習記録によって自身の目標を明確にし、実施後にそれを振り返って評価することも学生の意識に強い影響をもたらしたと考える。このように多かった2つのサブカテゴリーの項目については、学生ら自身の興味関心が強いこと、実習記録によって目標を明確にして臨んだことに大きく起因する結果であると考え。

本校では実習目標としてコミュニケーションについて挙げているが、行動目標の位置づけであり、コミュニケーションの結果については評価の対象とはしていない。しかし、学生にとってコミュニケーションに対する学びの多さと同時に、意識の高さについても今回明らかとなったため、今後評価対象として検討していく必要があることも示唆された。

表2 シャドウイングによる自身への影響の内容

	サブカテゴリー	
看護師の活動の特徴	効率的な行動 (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・行動に無駄がなく移動が早い。患者の特徴（性格）に合わせた看護を行っていた ・素早く的確に行動しかつ技術がしっかりしていたこと ・とても過密なスケジュールの中、仕事を効率よく正確にこなす ・効率よく病棟が回転するように考えていなければならないことを学んだ* ・想像していたよりも忙しく、暇もなく、常に動いていた ・一日の看護師さんの仕事やスケジュールや看護師の役割を理解することができた ・すばやく動いていて、明るく患者さんに接していたところがとても印象に残っています ・効率の良さを目の当たりにし、とても刺激をうけた。 ・患者との接し方や時間の使い方を大いに学べた ・看護の視点から必要なケアと患者さんの意志も受け入れつつ、優先順位の高いケアから始めて時間調整をしていた
	コミュニケーションの実践 (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・「薬を飲みたくない」と飲もうとせず、飲んでも苦しそうに嘔吐している患者に対応する看護師など、「ありがとう」と感謝されるばかりでない人と触れ合うことの難しさを知った ・看護師さんの患者さんへの対応を見ていてすんなり情報を得ていてさすがと思いました ・声かけ、対応の仕方 ・患者さんに対する声かけ ・どのように患者さんと接しているかなどを見れた ・患者さんとのコミュニケーションの仕方 ・コミュニケーションの取り方について教わった ・コミュニケーションの仕方が一番学ぶことができたのがシャドウイングだった ・コミュニケーション（非言語的コミュニケーション）をみることができ、自分も受け持ちの方と少しだけ非言語的コミュニケーションができるようになれました ・学内での実習でも患者さんにどのように声かけをすれば良いか、あまりよく分かっていなかった。しかし、シャドウイングをすることによって患者さんの自立を促すような声かけの仕方や、患者さんに同意を得る声の掛け方を学ぶことができ、これからは生かしていきたいと思った ・患者さんがリラックスできるようなことを自然と行っていた
	連携と調整の時間実際（チーム医療） (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師同士の情報共有 ・患者さんが入院している時だけでなく、退院後まで医師スタッフ間で話し合っ調整している
	看護活動のイメージ化 (13)	<ul style="list-style-type: none"> ・ADLの自立のためにできることはやってもいい、できないところは看護師がやるが頑張りすぎてしまう方もいるのでその見極めが大事と言われてとても印象に残りました ・看護師さんについてシャドウイングして看護師の役割と活動の特徴を理解できた ・テレビや患者側として普段は見えていたためリアルな現場を見ることができて良かった ・スタッフとの連携の大切さと、自分が働いた時のイメージを付けることができました ・実際に働いている自分を想像できた ・看護師の実際の動きを知ることができ、自分もこういう仕事をするようになるんだと想像できた ・看護師のイメージを高めることができました ・将来の自分の形をイメージすることができた ・患者と関わる機会が多いという看護師のイメージ像が現実で、自分が看護師になる道を選んでよかったと思った ・看護師さんの一日の流れを見れてよかった ・看護師の仕事を知れた ・仕事の動きがわかった ・看護師としてどのようなことが大切かわかった①
看護への興味・関心	憧れロールモデルの獲得 (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・とても憧れの看護師さんとなった* ・とても過密なスケジュールの中、仕事を効率よく正確にこなす患者さんにも丁寧な声かけをしていて、なおかつ学生的身である私にも丁寧な指導して下さりこういう看護師さんになりたいというモデルができた ・患者から感謝の言葉を言われたり、信頼されている看護師の姿を見てカッコいいと思ったし、自分もそのようになりたいと思った ・無駄のない素早いスピードをしながら、かつ冷静に動く姿が自分の中で理想像となった ・看護師になりたいとは前から思っていたのですが、より具体的にどういう看護師になりたいかがわかりました ・時間を計画的に使う私もあんなふうになりたいと目標ができた ・心がまえができた ・実際に自分の目で見ることで改めて看護とは何か考えさせられた
	モチベーションの向上 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師の仕事近くで見ると、やり方が分かり、とてもモチベーションが上がった ・看護師さんから「すごく良い職業だから、将来看護師になれるように頑張るね」と言っていただけ
	やりがい (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・大変だし責任も大きい仕事だけど、楽しそう、やりがいがありそうと思った ・非常にやりがいがありそうだと感じた
倫理観の養育	倫理観 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・少々機械的なケアを見て、自分の今の初心を忘れてはいけない、大切にすべきものであると強く感じた点 ・私の理想とする看護師ではなかった。ある意味いいお手本だと思いました

表2 つづき

サブカテゴリー		
学習することへの必要性	学習内容の目的の明確化 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・業務の内容を見学することで、現在の学習内容の目的が明確になりました ・無駄のない動きに加え、的確な判断と行動。今の私には出来そうにないと感じ、できるようにするにはどうすればよいか、どうすべきかを深く考えるきっかけとなった ・座学で消化できていなかったことでつながったことがあった
	知識の必要性 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・現場の臨機応変にテキパキと対応する素早さ、医師の専門用語を理解できる知識、コミュニケーション力、たくさんの自分に足りないものを実感した ・看護師は膨大な知識が必要なのが改めてわかり、今のままではダメだなと思った ・まだまだ勉強不足だということがわかった ・コミュニケーション力や技術だけでなく観察や判断力、体力も必要だと実感した
	体力の必要性 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・体力や素早さが必要だと感じ、日常的に運動を取り入れようと思いました ・体力をつけなければならないと痛感した
	意識の高まり (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・想像していたよりも忙しくハードだったのもっと意識が強まりました

【看護師の活動の特徴】の中で[コミュニケーションの実際]と同じ10件であったのが[効率的な行動]であった。学生の自由記載の文章には、[効率の良い]と表現している学生もいるが、初学者である学生がどこまで効率性の内容までを学んだのかは疑問である。恐らく、目まぐるしく病棟内を歩き回る看護師と同じように行動することで、看護師の業務の多忙さについて体感することができたのではないだろうか。その多忙さ、業務の多さから効率的に動く必要性について学んでいることを推測する。

これら、実習目標I看護師の活動の特徴について知ることで、学生は他のそれぞれの目標における学びも同時に得ていると考える。看護師を目指し、看護師の実際の動きや仕事がどういうものか知りたかった学生である。よって、それを知り、目の当たりにした看護や看護師の行動に感心・尊敬すればするほど自動的に看護への興味関心や学習することの必要性について感じるものがあるのは当然だといえる。しかし、記述内容を見てみると、「知識が必要なことがわかり今のままではダメだなと思った」、「勉強不足だということがわかった」など学習の必要性の実感に止まり、学習に取り組むべき内容は元より自分に何が不足しているのかまでは導き出せていない。

また、【看護師の活動の特徴】に分類されるサブカテゴリーの学びとして少数ではあるが[連携と調整の実際(チーム医療)]についても学ぶことができている学生もいた。本校では看護における連携や調整、チーム間での情報共有など概論の知識をより深める「看護管理」は3年次科目であり、初学者が

シャドウイングでここまで学ぶことができたことが驚くべきことであり、少数であることにも納得がいく。シャドウイングはこういった未習内容についても見学できる絶好の機会といえるが、初学者が未習内容の学びを学びとして認識するのは大変難しい。また、「倫理観の必要性」のカテゴリーでは少数ながらも看護師の共感できない言動が学びとして挙がっている。しかし、その学生らはシャドウイングの影響についての5段階評価では「大変ある」と回答していることから、学生は自身の倫理観をもって判断できていたと考える。看護学生、特に初学者においては臨床の看護師の言動はすべて正しいと思いきみがちである。それゆえに、倫理的に正しくない事象も「正しい」と思い込んだり、「正しくない」と感じて表出出来ず、罪悪感やリアリティショックなどネガティブな感情に捉われたりという可能性もある。これらのことから、学生がシャドウイングする看護師であるロールモデルの選定もたいへん重要といえる。ベナーは、臨床指導について「初心者の指導に当たる者が必ずしも臨床で上級技能を実践できる必要はないだろうが、初心者を安全かつ効果的に臨床状況に導く明瞭なガイドラインと原則を明らかにすることに熟練している必要はある。」¹⁾と述べている。これはロールモデルにも当てはまると考える。つまりロールモデルとなる看護師は、行う看護活動の目的や必要性が明確に把握できており、かつそれを学生に適宜説明できる能力が求められる。この点については、病院側の協力を得ながらロールモデルの選定や行動における根拠の説明や情報提供など、学生への関わり方の統一化を図っていく必要

がある。

こういった事実から、学生自身がシャドウイングを通して感じ得るものはたいへん幅広く、多くの学びが得られる可能性が秘められているといえる。しかし、経験から得られたものを具体的に表現することが未熟な学生は、学びや自己の課題を明確にすることが難しい。よって、教員や指導係が学生の経験を学びや成長に昇華させていく意図的な関わりが不可欠であり重要である。

このように、シャドウイングによって学生に得られる効果・影響はたいへん幅広くあることが明らかとなった。大坪らは、シャドウイングのやり方として、「この実習方法の目的は、ロールモデルをとおして自分の学びたいことを自主的に学ぶことです。漫然と一緒にも学びにはなりません。自主的に学ぶためには、【分析をもとに自分の組織の課題を明確にし、】課題達成のために何をみるべきなのか、しっかりと計画を立てなければなりません。」²⁾と、述べている。今回の結果からも前述した通りそれは明らかであり、ガイダンスの時点からシャドウイングの意義や方法について学生自身がイメージできるように説明していく必要がある。そして、学生自身が主体的にシャドウイングに臨めるよう事前に目標を明確に立てることの重要性を伝えていくことも大切である。

IX. 結 論

今回具体的な学生の反応から、初学者が看護師の特徴、特に看護活動のイメージ化を図る上でシャドウイングが効果的であることが明らかとなった。また、さらに効果的にシャドウイングを進めるための必要条件や重要事項も明確にすることができた。その内容については以下の通りである。

1. 学生自身にシャドウイングで何を学ばせたいのか学習目標を明確にする
2. 上記学習目標達成に向けたシャドウイングにおけるガイダンス内容の精選と実施方法を検討する
3. シャドウイングにおける実習記録の内容の精選を行う
4. 学生が主体的に学ぶ意識づけと共に学生自身

に明確な目的・目標をもって臨ませる

5. 臨床側と連携、調整を図り、ロールモデルや実施方法の検討・統一化など実習・学習環境の整備を行う
6. シャドウイング後には教員や指導係と共に学生が素直な気持ちを表出できる振り返りの場を設ける

教員や指導係が成長に繋げる関わりを意図的に持つことで、学生はシャドウイングという経験を学びに結びつけることができる。その学びは看護を行う上で必要かつ重要な様々な内容の可能性を秘めており、発展的に導いていくことでその効果はさらに高まっていくと考える。

最後に研究方法についてであるが、自由記載の感想では様々な感想が得られる反面、表現が曖昧で項目として分類しにくくデータとしての処理の仕方に多く戸惑ったことから今後は更に精度の高い研究方法を追求していきたい。

引用文献

- 1) パトリシアベナー (監訳: 井部俊子). ベナー看護論新訳版初心者から達人へ. 医学書院, P 159, 120-123, 2005.
- 2) 大坪明美, 村上真須美 (他). シャドウイング管理者研修へシャドウイングを活用する. 看護展望, 36(2)-0129, P 131, 120-126, 2011.

参考文献

- 1) 山口咲子, 鴨川聡子. 基礎看護学実習 I にシャドウイングを導入した取り組み～基礎看護教育での試み～. 近畿高等看護専門学校紀要, 11, 20-22, 2011.
- 2) 清水暁美, 荒井葉子. 基礎看護学実習 I で学生が学んだ看護師の役割. 看護学教育学会学術集会, 175, 2008.
- 3) 佐居由美, 大久保暢子 (他). 看護学導入プログラムにおけるシャドウイングアドバンスの試み. 聖路加看護大学紀要, 34(3), 70-78, 2008.
- 4) 前川幸子, 原田千鶴 (他). 基礎看護学実習において看護活動に同行した学生の学習内容. 日本看護学教育学会誌, 17, 119, 2007.
- 5) 渡邊郁子, 塚原節子. 看護基礎教育でのシャドウ実習実施により得られた看護学生の学び. 日本看護研究学会雑誌, 33(3), 285, 2010.